

ほめることは
どのような作用を
持っているのだろう

期待されない＝自由

またまたつづきの話

前号までに、親ばなれつつある子どもの不登校についてお話し、60.4でまじめたつもりでしたが、読者のお一人YRさんと話している中で、ハタと気づかされた事があり、あわてて60.5を書いている次第です。

今回は『ほめる』事を考えるわけですが、ほめるためには前提条件があります。この条件が満足されていないほめ方は、子どものこころに響きません。つまり、ほめる効果を期待できない恐れがあるという事です。

☆

では、前提条件とは何か。

やってみせ 言って聞かせて させてみて
ほめてやらねば人は動かじ

子どもが何を、どのようにしているのか、口出しすることなく見守る事、です。

これまでに、おとなは子どもの成長を願い期待する。この時、自分の夢の身代わりにしないで欲しいと書きました。

子どもは日々、おとなが自分を見守って（安全）くれている事を確認しています。そして、安全を確認できて初めて安心するのです。

この安心は成長期だけでなく、生涯を通じて重要です。家庭を設ける時にも、お互いに見守り合える相手を選ぶのが、その証拠と言えます。

この時、子どもは見守ってくれるおとなに、『信頼』を寄せます。そしてそれが「集団・社会」生活の基盤になるのです。

反対に、信頼できない人とは形だけの集団しか造れません。ですから「離婚」は、互いに見守られる家族であるという信頼、安心が失われた時には、必要な選択かも知れません。

★

ほめる効用とは、期待に応えながらも、グラグラ不安定な状態にある成長を補強し、自信を持たせるはたらきを言うのでしょうか。

しかし『ほめる・ほめられる』効果は、信頼関係にある者同士にしか在りません。形だけ、権威だけのおとながほめても、子どものこころが離れてしまう事もあるわけです。

この事は、新しく担任になった先生が、子どもの信頼を得るまでの間に起こりがちです。

これに加えて親が先生を悪く言うと、先生より強い信頼関係にある親が、まだ信頼の薄い権威だけの先生に対する不信が生まれます。その不信は、先生が代表する学校への信頼をそこなうかも知れません。そうなっては学校嫌い、勉強嫌いの子を作りかねないのです。

☆☆

信頼は、相手の期待に応える度に増します。反対に、形を持つ信頼としての約束を破ると、たった一度で壊れてしまう事もあるのです。

信頼は相互関係で、決して一方通行、一様なものではありません。何事かあった時、子どもの期待に応えて信頼関係を作らなければ、ほめても効果は期待できないのです。そのために子どもに自由にやらせ、その結果ではなく、やれたことをほめて頂きたいと考えるのです。

